

Title	地域創成に資する人材育成への一提案
Author(s)	塩見, 忠義
Citation	年次学術大会講演要旨集, 37: 541-544
Issue Date	2022-10-29
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/18604
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

地域創成に資する人材育成への一提案

○塩見忠義（元京セラオプテックス）

1. はじめに

イノベーションを語る時、多くの場合 稲盛和夫が研究の対象とされます。理由は倒産の危機に直面した多くの企業で、奇跡の復活を成功させた実績です。稲盛の経営を語る時《心の経営》が重要なキーワードの一つです。衆知の通り「フィロソフィ」「アメーバ経営」「時間当採算」「京セラ会計学」等々 世界にも類を見ない卓越した精緻な仕組みです。いずれも学術的にも優れたものですが、その根底には「人の心」が根付いています。当時の私は若い情熱で胸がドキドキ・ワクワクしていました。仲間同士、お互い共に成長している手応えを感じていました。“成長の実感”が生涯で最も充実している時間の証です。稲盛と同じ場に立合った一人として、器では有りませんがご参考のために幾つかの経験をご紹介します。

2. 京セラ教育の原点

○車座コンパが京セラ教育の原点



写真1 車座コンパの様子

写真1はコンパの様子です。

稲盛を囲んで床に直に胡坐をかいて座っています。

稲盛は気が溢れ指先にまで情熱が迸ります。

○稲盛の心の経営とは？

稲盛は決して自分の意見を無理強いする事はありません。

相手が心の底から、その気になるまで繰り返し話し込みます。

多くの仲間が彼等を取り囲んで、成行を注視しています。

稲盛と言葉を交わすのは一対一です。

いつも、稲盛さんは「話を聞く時は相手の眼を見なさい」と諭します。

理由は心の動きは目に出るからです。

○イノベーションに憧れる若者

若者は夢に向かって邁進します。

冒険・挑戦・未来 これらは彼等が好きな言葉です。

先輩の我々は、彼等にどのような舞台を準備出来るでしょうか？

的確な助言は誰の役割でしょうか？

イノベータはトップランナーですから、参考になるお手本はありません。

先輩がしゃしゃり出て若者に立ちはだかる事は意味がありません。

それより 経験からの助言は大変役立ちます。

○先輩の失敗談

新しいチャレンジに挑む中で、先輩が「それは既に試したが失敗した」と言う事が良く有ります。

その意見に どう対応するかが運命の分岐点です。

先輩の失敗は絵空事では無い事実だけに影響力は強烈です。

しかし、ここで断念すれば元も子もありません。

冷静に「先輩は何故失敗したのか？」と考察を重ねると、自ら道が開けます。

3. 稲盛の教えの実践

○一騎当千の“相棒”の見つけ方

どんなに優秀な人間でも独りでは知的にも体力的にも限界があります。“三人寄れば文殊の知恵”の譬えの通りです。厳しい課題に遭遇した時、手を携えて問題に立ち向かう“相棒”探しが、プロジェクトの結果を左右します。

ここで、私の相棒探しの極意を講演で触れたいと思います。

話が少し逸れますが、かつて、私が顧問を務めた会社の話です。

朝礼で私は次の様に切り出しました、「自分の上司が信頼に足るかどうかは、朝のラジオ体操を見れば一目瞭然」です。理由はこれからの仕事に“最高の準備”を進めている証です。

次の日から上司のラジオ体操はこれまでとは別人のように 背筋がピンと伸びていました。

◇始業5分間は“黄金時間”

◇出勤時、部下との交流

◇始動時の機械音

黄金の5分間に全ての鍵が存在します

○有能なリーダーの判断のコツ

重要な判断を迫られた時、「稲盛さんだったらどのように判断するだろう」と考えるのが私の習性でした。「稲盛さんだったら」と呟くと、何時の間にか雑然とした森を抜けて見通しの良い小高い丘に居ます。自分の都合や利害を超越して、いつの間にか「人間として何が正しいか？」との判断基準で考えています。目の前の損得勘定から解放されると、公正無私で信頼に足ると皆が支えてくれます。

○仕事に誇りを持つ

稲盛はコンパで **今、従事している仕事の意義**を語ります。

この仕事は社会にどのように貢献するのかを解り易く説明します。

社員は家で家族に話をします。お父ちゃんの話に耳にしたお母ちゃんは「お父ちゃんがどんなに素晴らしい仕事をしているか」を子供達に話をします。

仕事が忙しいお父ちゃんは休日が潰れる事もあり、家庭サービスが十分とは言えません。

しかし、子供達はお父ちゃんに不満を感じた事はありません。お父ちゃんは“我が家の誇”でしたから。

○ヒラメキは何処から来る？

他社に先駆けての新事業・新製品が熾烈な企業間競争の機先を制します。大事な鍵は現場が握っています。自分の現場は勿論重要ですが、とりわけ重要なのが『**お客様の現場**』です。

顧客の現場を掌中に収める事が百戦百勝の極意です。

さて、早暁のベッドの中で眼が冴えてなかなか寝付けません。

「新製品開発」や「仕事の工夫」を考え始めると、アイデアが次々と沸き上がります。

古の中国の賢人は「ヒラメキの瞬間」は三上に有りと言いました。

三上とは [鞍上] [枕上] [廁上] のことです。

馬に揺られている時、明け方にウトウトしている時、トイレの中、がヒラメキと出逢う場所です。

私のヒラメキの瞬間は 悶々と苦しんだ後に、ホッと緊張から解放された瞬間でした。

○情報の取り扱い方

誰も足を踏み入っていない早暁の畑で、土のついた朝採れ野菜を手に入れます。

現場に身を置く事が **“比類なき勝利の戦略”** です。

現場の五感で触れる膨大な情報が貴重な宝です。

脳の五感を扱う場所は広く分散しています。五感を同時に刺激されると脳の奥深くに刻み込まれます。

仮令、欠落部分が有っても補完し合って盤石のシステムが構築されます。

情報は生鮮食品で、すぐ腐ります。活字化とともに腐り始めます。

文字情報は説明のためには有効ですが、発想のためには既に過去のものです。

企画で力を発揮するのは現場を知り尽くした人間です。

ところが、残念ながら企画はエリートの部署と錯覚する若者が一定数います。

○仕事の夢・意義

稲盛は若者に熱く語ります。

「この技術は先端の技術だから、担当している人間は世界を見渡しても5人もいないのではないだろうか？」 「だから、我々は世界の5本の指に入る技術者（或いは技能者）になる」

5本の指に入るお父ちゃんは 家族の誇りでした。

家族は慎ましいながらも世界のどの家庭よりも幸せに輝いていました。

○言葉の壁

ドイツ企業の米国法人から稲盛へ依頼がありました。

経営を担っていたのは優秀なドイツ人技術者でした。

一向に減る気配を見せない工程不良に救いの手を差し伸べて欲しいと懇願されたのです。

不良発生の犯人（原因）の特定と対処に“現場を知り尽くした現場マン”を派遣する事になりました。

若いながら、神経が細やかで感度の優れたK君に白羽の矢を立てました。

彼が米国に旅立つに当たって稲盛から「心配事や不安があればどんな事でも相談に乗ろう」と申し出が有りました。

K君が口を開いた悩みとは・・・「私は仕事に対しては誰にも負けない自信があります。

しかし、私は勉強が苦手で英語がまるでチンプン・カンブンです。

こんな私が米国まで行ってお役に立てるでしょうか？」

これに続く稲盛の神アドバイスと、後日談は講演の中でご紹介します

4. その他の話題

限られた時間です。若し時間が許せば次の話題に触れたいと思います。

○中国で企業経営者の心を驚嘆みにした《稲盛哲学》

稲盛哲学は中国で熱狂的な支持を得ました。理由は稲盛さんのアドバイスを実践した企業が急成長を遂げたからです。今回、稲盛さんの訃報は中国のマスコミ各社で大々的に報じられ、中国各所は衝撃と悲しみに包まれました。

○宝石時計

究極の黒と言われた“カラスの濡れ羽色”で時計を造る企画が持ち上がりました。果たしてこの難題をセラミックで実現可能でしょうか？ 予想を遥かに越えた壁に、最終の開発期限が刻々と迫ります。

○中国の古代文明は黄河文明では無かった

日文研の梅原猛先生の依頼は京セラのセラミック技術で謎の古代中国の文明を読み解く事でした。

調査結果はPHP刊“歴史街道”の特集記事として発表されました。

この特集記事が 新たな物語の始まりでした。

5. おわりに

イノベーションに必要な教育をどのように構築するのかについて、稲盛さんから教えて貰った事を念頭に書きました。イノベーションは日本が世界に誇れる珠玉の財産の融合から生まれます。

団塊の世代は驚異的な頑張りで日本を世界のトップレベルまで引き上げました。何時の時代でも、若者は具体的な目標が決まれば遮二無二頑張ります。若者の明日に掛ける情熱と企業戦士の昔採った杵柄のマッチングが楽しみです。所で、稲盛さんのコンパが京セラ教育の原点です。コンパの後、参加者は明日の希望に心豊かになりました。不安は氷解し、明日からの日々が待ち遠しくなりました。これこそ社員教育の原点であり、真髄でもありました。

参考文献

稲盛和夫に叱られた 38 人の学びと喜び（出版文化社）